

【コロナ禍の中、重度訪問介護を利用した入院時介助の報告】

ヘルプセンター・いこら一



名前： K.H. さん

障害名： 知的障害、ウエスト症候群（てんかん発作）

年齢： 24歳

【好きな事】

- ①お気に入りの曲（山根康弘さん♪）を聴いて体を揺らすこと
- ②ペットボトルで地面を叩いて音を楽しむこと
- ③掃除機のノズルで遊ぶこと

【入院の経緯と介助の注意点】

2020年7月コロナウイルス感染の状況下、新たなVNS（迷走神経刺激療法）の機器の埋め込み手術を行い、11日間の入院生活を送る事になりました。

重度訪問介護を利用した入院について、行政や病院側との話し合いを重ね、ヘルパー派遣が可能となりました。

コロナ禍の中で、感染症への対策が介助者に求められ、消毒に加えて、院内に入る際に服装を着替え、入院中の本人・ご家族はもちろん、他の関係者への細心の注意を持って介助に入りました。

本人は縫合した箇所を搔いてしまう恐れから、事前に病院とご家族で同意の上、手足に加え腰もベルトで拘束されていた。精神的ストレスの軽減や入浴時の介助対応を行いました。

VNSとは??

VNS（迷走神経刺激療法）は、難治性てんかん発作に対する補助療法の一つで、電気が流れる機器を胸部に埋め込み、頭部の迷走神経に電気刺激を与えて、てんかん発作を減少させる治療法です。



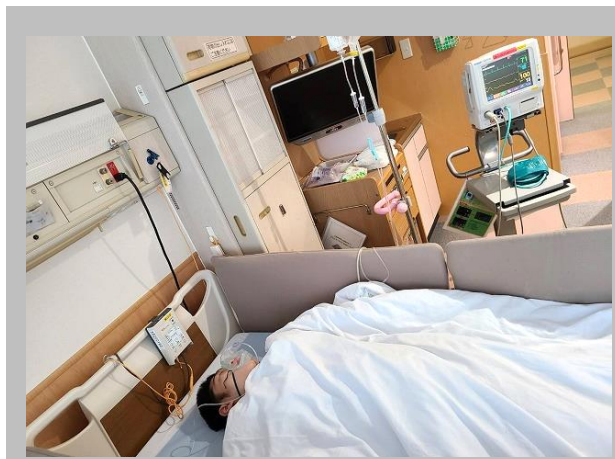
かいじょしゃ おも しえん かんそう 介助者の思い・支援の感想

かいじょしゃ かんそう 介助者①感想

身体拘束を目の当たりにして、本人さんは動けない事へのストレスを感じていたと思います。

ヘルパーと看護師との連携が図れ、重度障害者の入院時支援ができた事で、良い経験が積めた。

ご家族、本人の負担軽減ができたことに安心しました。



かいじょしゃ かんそう 介助者②感想

ヘルパーとして、何が出来たわけでもないが、本人と母に少しホッとしていただけただけかなと思う。

拘束による両足首の褥瘡を防げなかったことに、

途中1回でも足首の確認をしようと気がつかなかった

自分に怒りが込み上げる。

かいじょしゃ かんそう 介助者③感想

院内に入る前に、身だしなみを整え感染予防対策をしっかりとらせていただきました。

ご自宅での介助もそうですが、院内では当事者が起きられている場合は表情や変化等を伺いつつ声かけをさせていただきます。

お兄さんからのコメント！
「手術お疲れ様でした。
家でもダンスを踊ってね♪」

【入院時の生活についての母の思いと感想】

高校三年生の時に入院した時はヘルパーもおらず、ずっと一緒にいないと

いけなかった。以前は院内にコンビニはなく、H君が寝た時のみ看護師に声かけして、

一旦外に出て買い物をする制約があった。

今回の入院は、ヘルパー利用して行き帰りの送迎もでき、ヘルパーの入っている時間帯は、

自分の時間が取れて病院から離れることができた。

本人が拘束されて動けないのは辛いことではあったが、縫合後を引っ搔かないことや外に出

られた事で安心感があった。顔なじみのヘルパーを見る事によって安心感があり、母子とも

に負担軽減となった。

また、コロナ禍の中で嫌な顔をせず介助担当をしてくれた事を嬉しく思います。



今回の経験を大切に、入院時支援の必要性を、行政や病院・医師に働きかけ連携して、障害者でも当たり前に入院生活が送れるように取り組んでいきたいです。

ぶんせき おおたに みやうち
文責 大谷、宮内